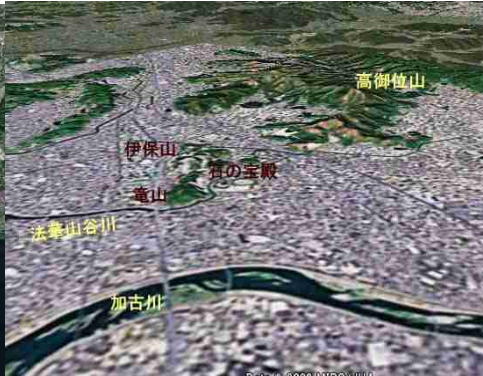


2009.2.27、兵庫県高砂市



石の宝殿



竜山

加古川の河口近く 瀬戸内海・播磨灘 淡路島を見晴らせる岩山「竜山」の尾根筋の岩斜面を四角く切り貫いた大きな空間に 謎の石造物「石の宝殿」が倒れた姿で鎮座している生石神社がある。

この謎の石造物がいつ作られたかは不明であるが、生石神社の社伝によると「神代の昔 大己貴命(大国主命)と少彦名神が出雲国から播磨国に来た際に石の宮殿を造ろうとして一夜のうちに現在の形まで造ったが、途中で播磨の土着の神の反乱が起こり、宮殿造営を止めて反乱を鎮圧した。しかし、夜が明け夜明けとなり此の宮殿を正面に起こすことが出来なかったが、「たとえ此の社が未完成になっても、霊はこの石に籠もり 永遠に国土を鎮めん」と言われた」と伝えられ、それ以来此の宮殿を「石の宝殿」、「鎮の石室」と称していると伝えられている。

このような巨大石造物の製作には強い鉄器工具の使用が不可欠であり、祭神である大国主命と少彦名命は古代製鉄と関係の深い出雲神であることなどから、この地が古い時代製鉄集団と関係があったのではないか？ との説がある。



古代の謎の石造物 石の宝殿



横 6.4m、高さ 5.7m、奥行 7.2m の巨大な社殿風横倒し石造物



また、この周辺から採取される「竜山石」は古墳時代中期畿内の権力者のほとんどの石棺に使った「大王の石」で、大和王権と密接な関係を持っている。

西へ向かう新幹線が神戸を出て、西明石を過ぎてまもなく 加古川を渡ると山全体が石切り場に見える白い岩崖が立ち並ぶ小高い山が見えてくる。この山が「竜山」で 石の宝殿はこの岩山の山腹にある。

野球好きであれば知っている高砂球場のすぐ隣を流れる法華山谷川をはさんで西側の岩山である。

淡路島の北部淡路市の丘陵地の尾根筋から弥生時代後半 卑弥呼の時代の国内最大級の鍛冶工房村「垣内遺跡」が発掘され、その現地説明会に参加。この垣内遺跡からは正面に播磨灘・家島群島 男鹿島、右手にはすぐ近くに姫路・加古川の海岸線が一望。この大鍛冶工房村のルーツは古代の大製鉄地帯である播磨とつながっているのではないかと……そして、すぐ手の届く対岸の海岸近くに鉄器工具なくしては作られ得なかった謎の石造物 石の宝殿。そして周囲の岩山は畿内の首長クラスの石棺材料「竜山石」を大量に切り出したところ。これらは ひょっとして 古代の製鉄集団でつながるのではないかと……と。

何回か出かけたことはあるが、「竜山石」の産地として出かけたことはなく、石の宝殿も記憶があいまいになっている。

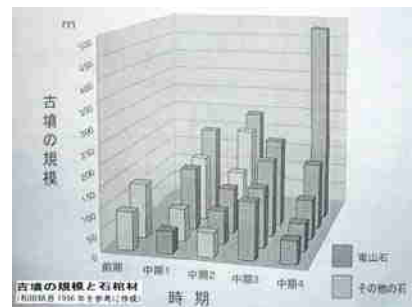
本当に鉄器が必要との確信がもてるだろうか……と。



生石の郷の「竜山石」石切り場



法華谷川より 竜山 石切りで垂直に切り取られた崖 右端山腹に生石神社



古墳時代 中期より 畿内大型古墳 家型石棺のほとんどが竜山石で作られた

ひょうご考古学セミナー資料より 中央写真は近つ飛鳥博物館展示より

1月 ひょうご考古学セミナーで「竜山石」について 話を聞いたところであったことも一因なのですが、一度 淡路の記憶がクリアな間に石の宝殿へ出かけようと 2月27日朝 原付バイクで出かけました。私の家から石の宝殿までは2時間あれば十分 加古川周辺へは何度も出かけたよく知った道。石の宝殿は国道から少し南へ入らねばならず、石の宝殿 そして 古代からの石切り場である「竜山」には長いこと行ったことがない。

どこでも 自由に登れ、止められるので原付バイクは近場のハイクには、本当に便利なのですが、今回はどうしても 市街地・国道を抜けていかねばならず、排気ガスを吸って花粉症がもろに再発。ひどい目にもあいました。

そんなんで、竜山の頂上への登る道を探そうとも思ったのですが、どうも道がはっきりせず、碎石場が島をめぐる男鹿島が頭をよぎって、地図にある三角点へはよう行きませんでした。なお、電車だと最寄駅は JR 宝殿駅から歩いて 20分ほど。

石の宝殿や竜山石 と和鉄の関連や石の宝殿の位置づけなど 興味を持っていることが多いのですが、まだ調べが進んでいません。今回は不思議な古代石造物 石の宝殿の概要と 古墳時代 畿内各地の大王の石棺材料「竜山石」の産地の紹介を石の宝殿 walk (写真) と 石の宝殿概説を2つの PDF 資料にまとめました。

また、今回まだ調べられていませんが今 この播磨 生石の地に興味を持っている事柄を、以下に記しておきます。

1. 今回 あらためて 巨大な石の宝殿を眺めて、 これは「鋼」素材による強力な鉄製の工具が大量になければ製作できなかったろうと。 そうすると この製作年代は日本で製鉄がはじまった6世紀以降なのかもしれない。
2. 一説には この石の宝殿が播磨風土記(713)に

「 伝えていへらく、聖徳の王の御世 弓削大連(物部守屋)の造れる石なりという 」

とあり、この石の宝殿の製作は7世紀といわれる。また、物部氏は古代の製鉄集団の頭である。

でも 物部氏が関係し手いたとすると出雲神は祭らない。

また、大和 明日香と葛城の境の小高い山の頂上部にこの石の宝殿とそっくり同じ形の石造物があると聞く。

この関係も面白い。

3. 続々と古代の製鉄関連集団がこの地と関連を持っているとの伝承。

竜山石の産地ということだけが この地の重要性の理由だろうか・・・

それとも やっぱり、この地が「鉄」など交易品の瀬戸内東部の流通路の重要拠点だったのだろうか・・・。

1. 謎の古代石造物「石の宝殿」 & 大型古墳 石棺材料「竜山石」の郷

生石の郷(高砂市)Walk 2009.2.27.

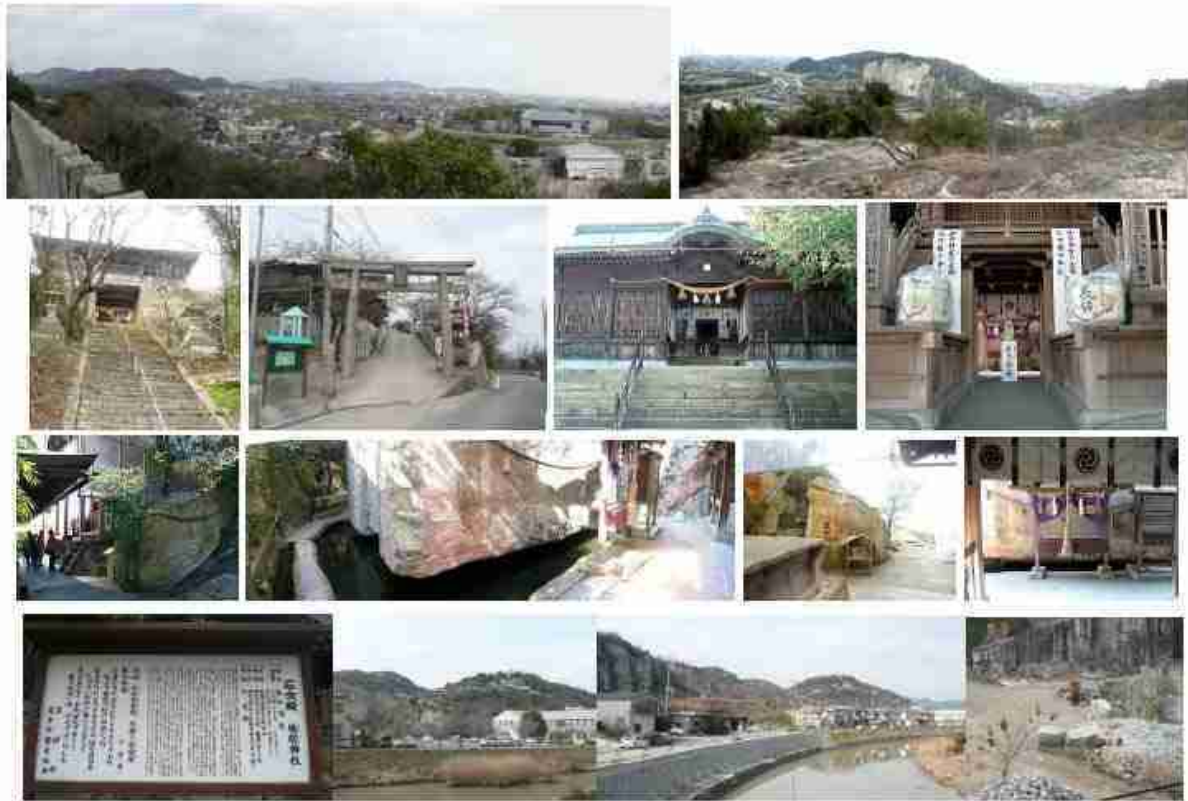
■ 石の宝殿 高砂市 生石神社

石棺材料「竜山石」の郷にある不思議な石造物

加古川河口近くの右岸の平野の中にぽつんと垂直に切り取られた崖が連なる小さな岩山「古代からの石材「竜山石(宝殿石)」の石切り場 竜山・伊保山」が浮かんでいる。この岩山(竜山)の頂上より少し下がった岩斜面に生石神社があり、その裏手の大岩盤斜面を割り貫いた四角の巨大空間に、切妻風の突起を後ろにして家を横たえたような横 6.4m、高さ 5.7m、奥行 7.2mの巨大な石造物がある。「石の宝殿」と呼ばれ、水面に浮かんでいるように見えるところから「浮石」ともいわれるが、いつ、誰が、何のために作ったのか、不思議な石造物。日本三奇のひとつとして 古代からあがめられてきた。



竜山の尾根筋の山の東山腹 生石神社 岩斜面を割り貫いた巨大空間の中に横倒しの「石の宝殿」がある 2009.2.27.



石の宝殿 生石神社と生石の郷 2009.2.27.

■ 古代からの石切りの郷 高砂市「生石」Walk

加古川を渡って国道 2 号線(旧道)を西へ少しすすむと 前方に北から伸びてきた高御位山の山並み そして、左手 南の市街地に白い山肌を見せる竜山の丘陵地が見えてくる。

加古川パイパスとクロスする少し手前のところ国道の北側が、JR 宝殿駅。高砂市のシンボル「尉と姥」の像があり、駅の名所案内に「石の宝殿(生石神社)」の文字が見える。

ここから、案内標識にしたがって、国道を渡り、南側右手に見える小高い丘を目印にすすむと、10 分ほどで、法華山谷川が流れる生石の郷。

川を渡って、生石の住宅地に入って、左へ丘に沿って南へ折れる。

石切の垂直の崖が続くというイメージは竜山の頂上部がある丘陵地の南半分で北側は緑の丘がつづく。その北と南のくびれの上の方の山腹に神社が見える。

これが生石神社でこの神社の建物に隠れて 石の宝殿がある。



JR 宝殿駅前の「尉と姥」の像



竜山の丘陵地の東側の裾を南北に流れる法華山谷川の川岸から見る竜山 石切場の崖 その左端に見える生石神社

住宅地の中ほどから 斜めに丘陵地へ登る生石神社への参道を登ってゆくところちょうど南北の丘の鞍部になっていて、そこが生石神社の入り口で横に大きな駐車場があり、南には 頂上部から垂直に切れ落ちた崖が続く竜山 その奥に海岸線から播磨灘が見える。崖の下は今も石が切出されている石切り場である。



竜山石切出しで作られた垂直の壁の上が竜山の頂上部 崖の下には石切り場が続く 生石神社の上部頂上公園より



二つの頂を持つ竜山の尾根筋のちょうど中央二つの丘の鞍部 生石神社の入口の鳥居周辺

生石神社の入り口の直ぐ西側の一枚岩の上に小さな小屋が建っていて、その横に石棺が置かれ、竜山 1 号墳石棺の標識が立っている。また この石棺の所から右側 出石神社の建物が建つ所は岩盤の尾根筋。来る時には 緑に覆われよく判りませんでした、この丘陵地全体が竜山石の岩盤である。

生石神社の建物の所から頂上へ向かって北に続く岩山の尾根筋がこの神社の神域で、建物の裏の岩盤を三方垂直に掘りこんだ中に 横倒しの形で石の宝殿が 祭られている。また、社殿・石の宝殿の後ろの頂上部へ岩盤を刻んで遊歩道がつけられ、頂上公園へゆける。尾根筋はこの出石神社の所から少し西に折れ曲がっていて、そこからこの尾根筋のもうひとつの頂「竜山」へと繋がり、生石神社の直ぐ南も切り立った崖になっていて、南側垂直の崖に沿っていくつも石切り場が続いているのが見える。遠くから 山を見ていたのではわからぬ生の石切り場の姿です。



竜山1号墳 石棺



竜山石切出しで作られた垂直の壁の上が竜山の頂上部 崖の下には石切り場が続く

生石神社の鳥居をくぐり、登り坂の参道を東へ少し回りこんだ所で社殿の前にでる。この前の広場からは南に広がる神戸から西へ広がる東播磨・播磨灘 そして西端に竜山が一望できた。



生石神社社殿前より 東播磨の海岸線 一望 2009.2.27. (写真合成)

この社殿の入り口をくぐって 奥に進むと岩肌で囲まれた狭い空間で狭い間から上の空だけが覗いている。一瞬良くわからなかったが、石の宝殿の巨大な石造物の正面前。拝殿の向こうにご神体石の宝殿の岩がある。拝殿の横の所から ぐるりとこの巨大石造物を回ることが出来る。岩の大きさは、一辺が約6m。正面は平らですが、左右には幅1.6mの溝が縦に掘られています。また、背面は屋根型に中央部が突き出ている。ただ 狭い空間なので ここからはどう写真をとっても1枚の写真に入りきれない。巨大である。また、岩の底も削りこまれていて、まるでその下の池に浮いているように見え、「浮石」とも呼ばれる。



拝殿の奥に鎮座する謎の石造物 石の宝殿

拝殿のところへ戻り、岩肌に刻まれた頂上部へ行く遊歩道を登って、
 拝殿の上部に回りこむと石の宝殿の上部から全体を眺められる。
 左右と裏側の三方より岩壁が迫っていて、周囲の岩が掘り除かれ、
 真ん中に石の宝殿を掘り残すというように造られているのがよく見える。
 このまま 拝殿側に倒せば宝殿が起きる。

どうもそれが 本来の完成された姿のようだ。

また、この岩山全体が一枚の岩盤で、その岩盤を掘り込んで石の宝殿が作られている。

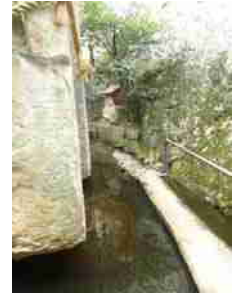
直線で切り込まれ、きれいに整形された岩肌
 そして垂直に掘り込まれた周囲の岩壁も含め、
 石が削りやすい凝灰岩質の竜山石といえども、
 強力な鉄製「鋼」の工具が大量にそろわないと製作は難しいだろう。

やはり、製鉄集団がこの謎の石造物の製作にはかかわっていたかも知れない。

大きな岩盤の表面を削って頂上部へ階段が刻まれ、頂上部は頂上公園になっていて、そこからは 四方が一望。

すぐ南にはこの岩山の尾根続きに石材切出しによる垂直の崖が続く「竜山」が見えている。

また、直ぐ西には同じく石切り場のある佐保山
 北には三角の美しい山頂を持つ高御位山が見える。いずれも竜山石の名産地である。



石の宝殿の底の部分



拝殿の上側から見た石の宝殿 2009.3.27.



石の宝殿の岩山の頂上部より 竜山 2009.2.27.



竜山 石の宝殿の岩山の頂上部 2009.2.27.

石の宝殿の岩山 頂上公園よりの眺望 2009.2.27.



北側 高御位山



西側 伊保山



南側 竜山

岩山を下って、元の生石の郷へ戻ってくると、操業中の石切場とその工場が覗けました。

竜山石は古墳時代大王の石棺の材料として広く使われたが、その後も種々の建設資材などとして使われ、現在も種々の用途に使われている。この竜山地域から北の高御位山にかけてはすべてが岩山。まだまだ 採取が可能な竜山石の産地。

今後 どうなるかは わかりませんが、現在の景色 古墳時代の石材採取地の歴史の街として残してもらおうとありがたいと思えのですが、虫のいい話かも……。

不思議な巨大石造物が 巨大岩盤の中に閉じ込められている。この石の周りをゆったり巡りながら、この石造物にイメージを膨らませ、いやになったら、一望できる播磨平野を眺める静かな石切りの郷 walk。

いかがでしょうか……

5年ほど前 アメリカのアトランタで同じような一枚岩の岩盤の山に登り、岩の上から 360 度地平線を眺めましたが、スケールは違いますが、良く似た広い平野の中に浮く岩盤の丘。広い平地の中 浮島のごとく小高い丘が浮く。その一枚岩の岩盤の丘が日本を作った初期大和王権の大王たちを収めた石棺の採取地。随所にその痕跡が見られ、不思議な巨大石造物もある。

観光地でもなく、歴史が看板の重い町でもない。でも イメージをふくらませば、物語がいくらかでも浮かんでくるような普段着の小さな歴史の街です。久しぶりに 喧騒の国道を外れ、生石の郷に入って そんな感じを持ちました。

また、ゆっくり石の宝殿を眺め、あまり知らない東播磨の歴史 そして ここにも 製鉄集団の痕跡がありそうに思える歴史にちょっぴり触れられたのも収穫でした。



竜山石の郷「生石」の石切り場 2009.2.27.



2009.3.15. google earth に東播磨 石の宝殿 walk のトラッキングを移しつつ

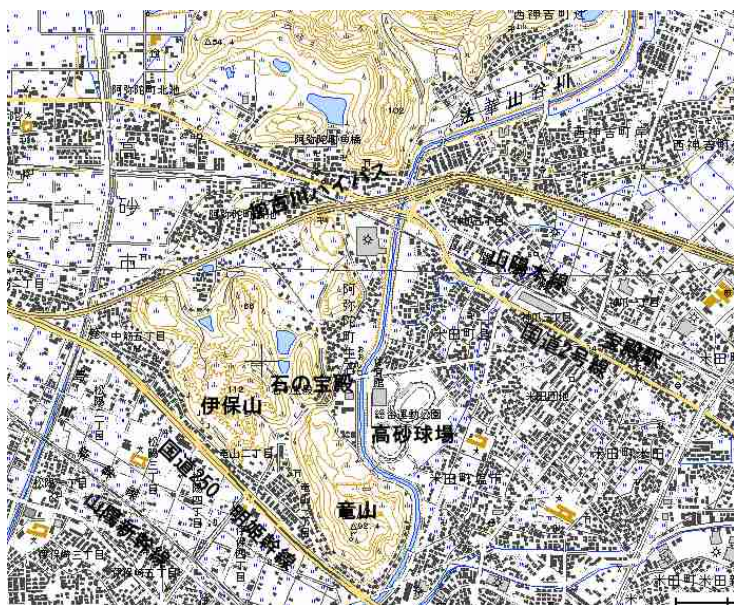
by Mutsu Nakanishi

2. 資料に見る古代の石切りの郷「生石」-石の宝殿・竜山石概説- インターネット検索ほか



生石の郷 法華山谷川

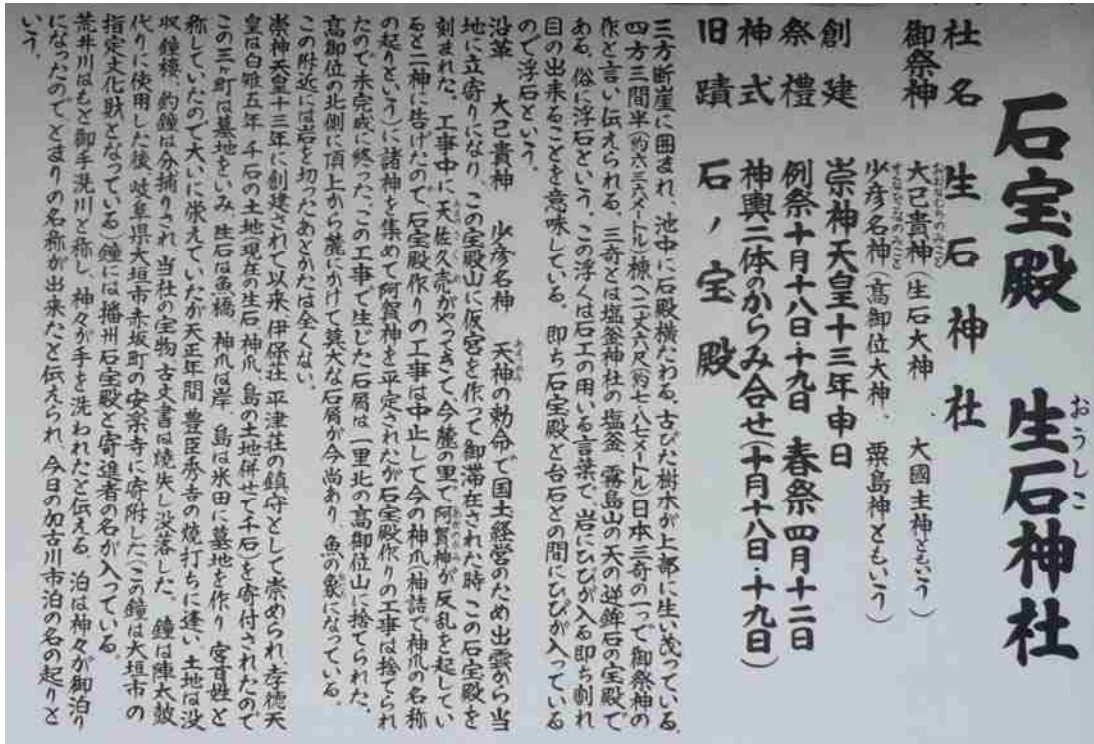
生石神社 石の宝殿



古代からの石切りの郷 生石の郷

● 石の宝殿 & 生石の郷 の由来

1. 生石神社 社伝による石の宝殿の由来



2. 播磨風土記に記載された生石の郷

大國の里 土は中の中。大國とよぶわけは、百姓の家が多くここにたむろしていた。だから大國という。

この里に山があり、その山を伊保山という。仲哀天皇を神と奉り、神功皇后は石作連大来を連れて讃岐の国の羽若の地の石をお求めになられた。その地から海を渡って来られて、まだ御廬をお定めにならなかつたとき、大来が(絶好の地を)見出してみんなに知らせた。だから美保山という。山の西に原がある。名を池之原という。原の中に池がある。だから池之原という。

原の南に石の造作物がある。その形は家屋の如くで、長さは二丈、巾は一丈五尺で、高さも同様である。その名号を大石という。言い伝えによると、聖徳の王の御代に弓削大連(物部守屋)が作った石である。

● 竜山石(宝殿石) 学名 流紋岩質溶結凝灰岩の解説

兵庫県の加古川下流右岸に産する流紋岩質溶結凝灰岩の石材の呼称で、白亜紀後期(約7000万年前)の火山活動によって噴出した火砕流堆積物が厚く堆積したもの。

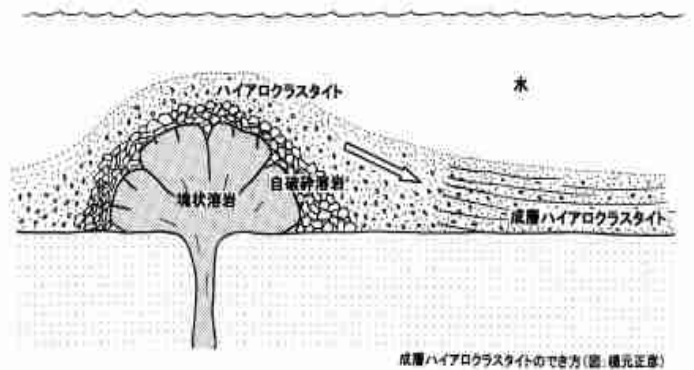
古墳時代、畿内の大王や豪族などの石棺にも数多く使われており、7世紀頃に造られたと考えられる「石の宝殿」は宝殿山の中腹にある約500トンの浮石で、生石神社の祭神として祭られ、江戸時代の末、シーボルトも訪れヨーロッパに紹介されている。古墳時代中期には、畿内の権力者のほとんどの石棺にこの竜山石が使われ、「大王の石」と称されました。

古墳時代中期の石棺はほとんどが6枚の板石を組み合わせてつくられた「長持形石棺」。

古墳時代後期には、この石から「家形石棺」がつけられた。この頃は、地方の豪族や有力者の墓にも数多く利用された。鎌倉～室町時代には、五輪塔や宝篋印塔など、江戸時代の初期には姫路城の石垣などにも利用された。

明治以降には、旧造幣局鑄造所(1870年)や住友銀行本店ビル(1922年)、京都ホテル旧館(1928年)など、近代建築物などの壁材として利用された。

竜山石の採掘は今も続けられ、河川や公園などの石垣、モニュメントや花壇の縁取り石など、建築用や造園用に広く利用されている。



● 石の宝殿 概説

岩山をくり抜いた穴にほぼ直方体の巨石が池に浮いたように鎮座する石の宝殿(生石神社裏手)と南側 400m には日本三奇の一つ生石神社の裏手に鎮座する切妻風の突起を後ろにして家を横たえたような横 6.4m、高さ 5.7m、奥行 7.2m の巨大な石造物がある。「石の宝殿」と呼ばれ、水面に浮かんでいるように見えるところから「浮石」ともいわれていますが、多くの謎につつまれ、いつ、誰が、何のために作ったのか、不思議な石造物。



また、すぐ南側には 古くは仁徳天皇陵の石棺など数々の石棺にも使用された軟質で加工しやすい竜山石(宝殿石)の採石場があり、壮大に岩肌を垂直に覗かせた風景を眺められる。

生石神社の社伝によると、

「神代の昔 大己貴命(大国主命)と少彦名神が出雲国から播磨国に来た際に石の宮殿を造ろうとして一夜のうちに現在の形まで造ったが、途中で播磨の土着の神の反乱が起こり、宮殿造営を止めて反乱を鎮圧した。しかし、夜が明け夜明けとなり此の宮殿を正面に起こすことが出来なかったが、「たとえ此の社が未完成になっても、霊はこの石に籠もり 永遠に国土を鎮めん」と言われたと伝えられ、それ以来此の宮殿を「石の宝殿」、「鎮の石室」と称している」

と伝えられている。



この石室は、三間半(約7メートル) 四方で棟丈は二丈六尺(約6メートル) の三方岩壁に囲まれた巨岩の宮殿で、池中に東西に横たわって浮く姿である。この工事に依って生じた屑石の量たるや又莫大であると推察され、一里北に在る霊峰高御位山の北側に大量にある屑石がそれであるとも言われている。

池中の水は如何なる旱魃にも渴することなく海水の満干を表わす霊水と言われている。

● 石の宝殿 播磨風土記の記述 記紀には記載がない

播磨風土記の印南の郡大国の里の条には、以下の話が記載されている。

『原の南に、石の造作物がある。その形は家屋の如くで、長さは二丈、幅は一丈五尺で高さも同様である。その名号を大石という。言い伝えによると聖徳大王の御代に弓削の大連が作った石であるという。』

また、この石の宝殿とそっくりな石造物、「益田岩船」(推定 800t、高さ 4.7m以上、横 11m、奥行き 7.2m、標高約 130m)が奈良県橿原市の橿原ニュータウン内、白橿南小学校の西の丘陵(岩船山)の頂上付近にある。初期大和の中心部葛城と明日香を分ける丘陵地の丘の上である。完成すれば、ほぼ同じ形状となり、横倒しの状態での製作、見晴らしのいい丘の中腹の設置場所などの条件もほぼ同じである。本当に謎の石造物である。

また、この播磨と大和のつながりについても イメージがさらに広がってゆく。



● 竜山石 補足 インターネット検索整理

この竜山石には3つの色がある。

「青竜石」、もっとも変質の程度が低いもの

「黄竜石」、風化によって基質に微細な水酸化鉄が広がったもの

「赤竜石」 岩石の固結末期に節理に沿って上昇したマグマ残液の熱水によって熱せられ

白雲母や方解石ができてその周りに酸化鉄ができたもの

加古川東高校地学部が日本地質学会 2008 秋田大会「小さな Earth Scientist の集い」優秀賞受賞研究より



竜山石「黄」



竜山石「青」



竜山石「赤」

竜山や伊保山の石切場の崖は、竜山石の大きな露頭。少し離れてこの崖を見ると、淡緑色の層の間に、濃緑色の層が数cmの厚さで平行にはさまれる縞模様が平行に入っている。

淡緑色の部分には、数cm～数mmの大きさの白い流紋岩の岩片が多く入っており、濃緑色の部分には、この流紋岩の岩片がほとんど含まれておらず、長石の結晶片が白く点々と含まれている。竜山石には柱状節理がほとんど見られないことから、水中で形成されたもの（カルデラ湖の中で再度火山活動がおり、火砕流が発生）



石切場の風景



石切場に見られる成層構造

淡緑色の基質の中に、それより少し濃い緑色の流紋岩の岩片が点在。この流紋岩の岩片は、不規則な外形をしたものとフレーク状のものがある（最大15mm）。

流紋岩の岩片と基質との境界はシャープですが、岩片の外形は複雑に入り組んでいます。流紋岩の岩片はガラス質で、流理構造を示すものも見られます。また、石英と斜長石の斑晶を少量含んでいます。岩片は雑然と散在していますが、フレーク状のものは平行に並ぶ傾向があります。流紋岩以外に、軽石や黒色の泥岩を岩片として少量含んでいます。基質は、細粒で緻密、石英と黄褐色に色づいた斜長石の結晶片を含んでいます。



竜山石の研磨面(写真横7cm)



青竜石(横10.5cm)



黄竜石(横11.5cm)

● 竜山石の使われているところの例



雲部車塚古墳(篠山市)の長持形石棺(5世紀)
復元したもの(兵庫県立考古博物館)



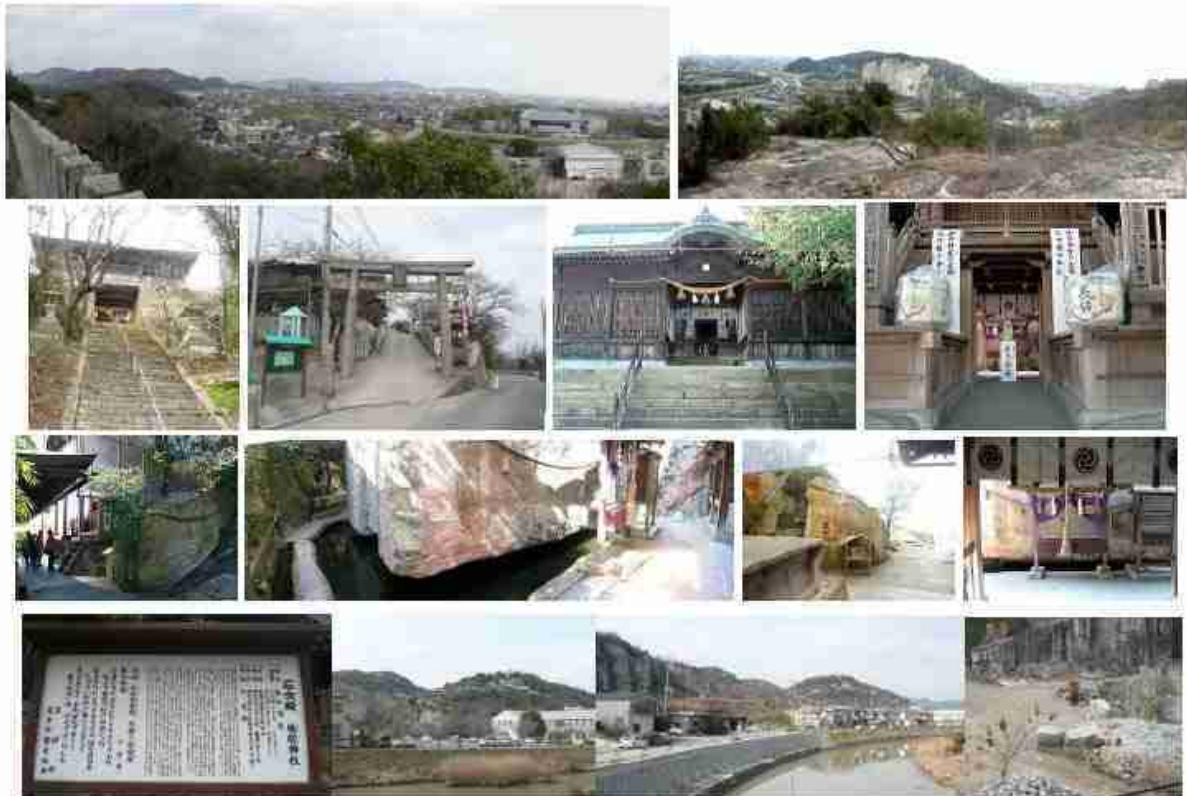
曾根天満宮の石橋 1723(享保8)



高砂海浜公園のモニュメント



倉敷 大原美術館の礎石 1930(昭和5)



生石の郷 と 石の宝殿 生石神社 2009.2.27.